

企業の経営成績と財政状態を報告するため、企業の諸活動を認識・測定する一連のプロセスが会計であり、それを学ぶのが会計学です。その報告は投資家等の意思決定のために外部の利害関係者に対して行われますが、経営者の意思決定のために内部管理者に対しても行われます。特に外部に報告するためには一定のルールが必要であり、それが会計基準として定められています。

「鏡」としての会計学

す。魔法という修飾語を付けたのは次の三つの理由からです。第一に、外形ではなく中身を映し出します。第二に、映し出されたものが大きくなったり、小さくなったりします。第三に、映し出すことによってその実体にも影響を及ぼします。

測定されます。会計基準が変更されれば、その数字は変化し、大きくなったり小さくなったりします。また、同じ会計基準であっても、全ての企業に単一の会計処理方法を強制しているのではなく、認められた方法の中から、ある程度自由に企業が選択することができます。例えば、有形固定資産の会計では、定額法と定率法の二つの減価償却方法から選択することができます。固定資産の金額は非常に大きく、どちらの方法を選ぶかによって、当該企業の会計数値は大きく変化します。

最後に、会計は企業が行っている様々な活動を映し出すものであり、その意味

では受身的な側面が強いと言えます。しかし、ある特定の項目や状況においては実体である企業を映し出した会計数値が、実体を変化

企業実体を変化させることもある

会計を通して最終的には決算書が作成されて、外部に示されます。誤解を与えないことを恐れずに言い換えるとしたら、会計、その決算書は鏡のようなもので、しかもそれは魔法の鏡で



名古屋市立大学大学院
経済学研究科教授

吉田 和生

行われている企業の諸活動の内容を全てまとめて決算書に映し出します。

次に、企業の活動やその成果（財産など）は複雑多岐にわたっています。例えば、現金の測定は議論の余地がなく、確定しています。

しかし、企業の財産には棚卸資産、土地や株式などもあり、これらの金額はひとつに確定しておらず、それを決定するのが会計基準です。売上をはじめとする収益や費用についても、会計基準によって金額が決定されます。このように、企業の活動やその財産は特定の会計基準に従って数字とし

ます。また、借入契約等の負債契約においても同様な影響があります。特にこの三つ目の側面に焦点を当てて、会計の経済的帰結や経営者の報告利益管理の要因分析など、多くの学術的な研究が行われています。

よしだ かずお 財務会計、財務分析。名古屋市立大学大学院経済学研究科博士後期課程中退。1964年生まれ。

